

〈論文〉

都市の「広場」に響いた音 空間の聴覚的な占有

桐谷 詩絵音

1. はじめに

都市研究の文脈では、広場など公共空間の空間管理の手法の高度化がしばしば指摘されてきた。SNSをはじめとするモバイルメディアや監視カメラなどのテクノロジーが新たに普及した結果、公共空間に集まる人々はその行動がつねに監視・捕捉されることになる。そして、こうした管理を正当化する「防犯のため」や「安心のため」といった標語のもとで、予測不可能なものができるだけ空間から排除され、空間を利用する人々の身体が電子情報として均質化されるようになったという（阿部 2006; 南後 2016）。こうした論調で、現代の空間管理はたびたび問題化されてきた。

事実、インターネットの爆発的な拡大や監視技術の巧妙化によって、現代の都市空間が「無菌化」されているという批判は有効性をもつ。しかし、どれだけ情報化や技術革新が進もうとも、公共空間に集散する身体は質量をともなった物理的存在であり、そこでは情報空間上での管理が、物理的な空間や身体の管理へと変換される過程が存在しているはずである。

都市の公共空間における管理をみると、「均質化」や「偶然性の不在」といった抽象的な述語を使うだけでなく、空間と身体が物理的にどう媒介され、管理されているのかを、具体的に明らかにする必要があるのではないだろうか。空間管理に関する先行研究は、その背後にある「防犯」や「安心」のイデオロギーを明るみにすることに注力してきた一方、そのイデオロギーがどのようなテクノロジーによって、物理的空間の現実へと変換されてきたのかのメカニズムを問うことを、あまりしてこな

かった。

同時に、空間に散りばめられた管理技術によって、そこにいる人々が受動的に支配されるという、技術決定論的な理解には問題がある。本稿が示すように、空間はときとして逸脱的に読み替えられ、使用されるからである。

本稿が狙うのは、都市空間がますます高度に監視・管理され、気がつかないうちに自由が縮減されているという、抽象的な空間管理論の超克である。空間を管理しようとする権力が、どのように実際の空間のなかに具現化され、その空間に集まる人々の身体の活動を制限しようとしたのか。そして、実際に空間に集まった人々は、どのようにこの管理に従い、あるいはこの管理の網の目をかいくぐったのか。空間を管理する主体と、空間を実際に使用する主体との間のせめぎあいのダイナミズムをとらえ、現実存在する空間の物的な側面で何が起こっていたかに着目することで、空間の管理権力の過大評価にも過小評価にもおちいらぬ分析が可能となるのである。

2. 従来の都市空間管理研究

都市における空間管理の問題を論じた先行研究として、ここでは南後由和（2016）と阿部潔（2006）を参照する。

南後は、公共空間のなかでも都市の広場に注目している。広場の構成要素を、建築やデザインなどの物理的なマテリアル面を指す空間形態と、「広場を取りまく集団のあり方や人間関係、人びとの行為や意識や規範、コミュニケーションなどを指す」（南後 2016: 74-5）社会形態とに分けている。そのうえで、「従来、建築・都市計画学では広場を空間形態に偏って、社会学では社会形態に偏って論じる傾向にあり、なかでも都市社会学の文脈では、町内会・自治会研究やコミュニティ研究に代表されるように、「広場は透明な器として扱われ、その器の中身ばかりに焦点があてられてきた」と批判する（南後 2016: 75）。

南後は広場を、空間形態と社会形態の双方によって決定されるものとして捉えており、計画者が意図しなかった「広場の社会形態」が生み出され、「広場として計画されていない場所が『広場化する』こともある」という認識を示した（南後 2016: 76）。

こうした南後の「広場」観は、その空間にこめられたイデオロギーを分析すると同時に、広場に集まる人々の社会的関係も研究の対象に入れようとするものである。社会的事実としての交通や建造物を重要視する分析視角は、都市空間に関する研究がイデオロギーの暴露のみにとどまってしまう現在の状況を断ち切る上で有効である。

そして、空間形態・社会形態のほかのもう一つの軸として、南後は1960年代以降

の建築学者や都市社会学者による言説を参照しながら、「西歐的広場」・「日本的広場」という枠組みを導入する。「西歐的広場」の空間形態は、都市中心部に位置し、建物に囲まれ独立したオープンスペースの形として現れる。そしてその社会形態は、誰もが参加でき(「平等」)、自由に討議でき(「自由」、権力や束縛から解き放たれる(「解放」)空間である、という原則を体現しているという。いっぽう、「日本的広場」の空間形態は、都市の中であくまで相対的にひらけた空間が、そこに集まる人間の主体的な欲求や行動によって不定形に「広場化」されたものとして現れる。そして、その社会形態は、「西歐的広場」のような市民の自治によって獲得されるのではなく、祭りや縁日のような祝祭的空間として成立しているという。

南後は、ベトナム反戦運動における新宿西口地下広場でのフォーク集会と、1970年大阪万博の「お祭り広場」を分析しながら、次のように論じる。すなわち「日本的広場」は、当然の権利として要求される「使用価値」の都市空間から、〈広場らしさ〉を消費するための「交換価値」の都市空間へ変容したのであり、それは日本において「広場」が、「政治の場」から「消費の場」へと転換していった過程であった(南後 2016: 70-9)。

その過程で、大阪万博「お祭り広場」では「大量のガードマンが配備されていた」こと(南後 2016: 91-2)、ショッピングセンター内部に数多くつくられた「広場」ではそこが政治運動的な「示威の場」となることが妨げられていたこと(南後 2016: 101)、そして2010年代の「渋谷ハロウィン」では渋谷スクランブル交差点が警察の厳格な監視下にあること(南後 2016: 143)を南後は指摘し、そこが民主主義の三原則を容認する場ではなく、アクティビティが制限され高度に管理された空間であると結論づけ、分析を終えている。

しかしこの見方は、紋切り型の現代社会批判に終始してしまう危険をはらんでいる。「消費の場」としての「広場」では、企業や行政による管理権力のもとで、消費・管理社会を生きる人々が一元的に操作されている、という分析だけでは、管理権力を過大評価するだけでなく、計画者や管理者の意図を外れたかたちで「広場」が使用されるダイナミズムを過小評価することになるだろう。なされるべきは、それがいかなる「政治」や「消費」の場であったのかを分析することであり、「政治」や「消費」と割り切ってしまうことによって見えなくなったものを、もう一度吟味しなければならない。

そのためには、民主主義の三原則を容認する「西歐的広場」や、主体的な欲望にもとづく祝祭的空間としての「日本的広場」など、都市空間の「空間形態」と「社会形態」とを一対一で対応させてしまう分析視角も、再考されなければならない。都市空間に

先験的な理念型を当てはめてしまうまえに、1960年代以来の「広場」にまつわる言説をまずいったん断ち切る必要がある。そのうえではじめて、空間の管理者と使用者が、どのようなイデオロギーを背景に、そしてどのような身体的実践を用いて、空間をめぐる闘争を繰り広げていたかを分析することができる。

都市の空間管理に関するもうひとつの研究に、阿部（2006）があげられる。

阿部は、具体的な都市空間の事例を用いながら、その管理を描写する。たとえば、ショッピングモールのカフェテリアは、人々が憩い会話するためのオープンスペースだが、常に注文の呼び出しブザーの音によって会話は中断させられ、ガラス窓や開放的空間によって外部からの視線に晒されざるをえないという点を批判した（阿部2006: 19-23）。また、小学校の運動会会場は、高い場所に設けられた主催者席と、遮る物の存在しない運動場の開放的空間、そして場を一元的に席卷するアナウンス音声によって、やはり管理者による監視に晒され続ける空間であるとしている（阿部2006: 43-4）。

阿部がここで重視するのは、「自由の空間」と対照的に附置される、「空間の自由」の概念である。「自由の空間」とは、その空間で人々が「自由」に行為できることを意味する。しかし、それはあくまで行為者本人が「自由」だと思っている（思わされている）にすぎない。実は、管理的なアーキテクチャによって、本人の気づかない間にその空間の「自由」は縮減されている可能性があるのだという。いっぽう「空間の自由」とは、その空間で生起しうる行為の可能性が確保されていることを意味する。その空間では、管理的なアーキテクチャによって行為の可能性が未然に縮減されることなく、空間が様々に使用されうる余地が残されている（阿部2006: 40-2）。阿部は、現代の都市空間では「空間の自由」が縮減されているとして、その管理社会化を批判する。

「空間の自由」が実現されているモデルとして阿部が対置するのが、神社の境内での祭りである。そこは、管理者が一度に見渡せるような平坦なオープンスペースではなく、起伏に富み入り組んでいるため、権威的な中心点をもたない「バイオキュラー（複眼的）」な空間であるという。またそこは、単一の行為者（たとえば運動会における主催者）の発する音声が一元的に場を支配することはなく、屋台の売りこみの声や舞台でのパフォーマンスの音など、様々な音が共存する「ポリフォニー（多声的）」な空間であるという。この多元性が保存されていることによって、想定外の要素との出会いが生まれ、「空間の自由」が担保されているというのだ（阿部2006: 47-9）。

興味深いのは、阿部が運動会会場を「広場の自由」、神社の祭りを「街路の自由」と名づけている点である。「広場」では、「外部」から遮断された「内部」の空間にお

いて、個々人の自由な活動が可能となる。しかし他方、権威的な視線によって一望することができてしまう「広場」では、人々がマス（mass）として動員される危険が常に潜んでいるという。いっぽう「街路」は、独立した区画をもたないために、全体を掌握することが難しく、また常に流動する群衆の中では「思わぬ出会い」にめぐりあう可能性が残されているという（阿部 2006: 49-51）。

「街路の自由」という概念は、南後（2016）が用いた「日本的広場」の概念に近似しているが、「広場の自由」に関しては、民主主義の三原則を仮託する南後とは対照的に、マスとして動員される危険性と表裏一体であるという否定的評価を行なっている。あくまで空間に即した分析から、空間にひそむイデオロギーを明らかにしようとする阿部の手法は、先験的な枠組みの措定を切断する可能性をもっている点で、有効であるといえる。

しかしここでも、まず前提として管理社会論をもちこんでしまった結果、行政や企業の思惑通りに管理された空間と、そこで踊らされる人々、という以上のシナリオが描けていない。南後（2016）が、理想的なオープンスペースとして「西欧的広場」を論じた一方、阿部（2006）は、まさにそのオープンスペース性を根拠に「広場」を否定的に評価した。同じ管理社会論の立場からの「広場」の語りが、それぞれ対照的な分析を行なっている事実は、管理社会論のみから「広場」を論じることの限界を端的に表している。

3. 本稿の分析視角

本研究が強調したいのは、管理社会論的な都市空間の把握そのものの批判ではなく、アприオリな管理社会論のもちこみによって具体的な都市空間への注目が妨げられてしまっていることの問題点である。

吉見俊哉（2008）は、浅草、銀座、新宿、渋谷という近代の東京の「盛り場」の分析に際して、「上演論的パースペクティブ」および「〈出来事〉としての盛り場」という視角を提示している。ここでは、「盛り場」は〈出来事〉であるという認識を示す一方で、〈出来事〉をとり囲む諸装置という〈容器〉への注目の重要性を強調している（吉見 2008: 36-7）。南後（2016）も、「広場」を捉えるにあたって、その中身としての参加者や人間関係のみならず、都市空間としての「器」も射程に収めなければならないと指摘しており（南後 2016: 75-6）、空間が単なる「環境」以上の重要性をもっているということは、両者に共通する問題意識である。

これをまとめれば、ある「台本」と「諸装置」による演出がなされた空間という〈容器〉

に、〈演者＝観客〉としての人々が参画し、都市生活や暴動が生起していく、その一連のプロセスにこそ注目しなければならない、ということになるだろう。空間そのものだけではなく、そこに集散する人々の身体はもちろん、交通手段、通信手段、衣装などのメディアやアイテムもまた、空間にもちこまれる小道具や大道具としての役割を担っている。こうした、空間、身体、そして両者を媒介するメディアに注目することを通じて、実際にどのように空間が管理・演出され、そして人々がその空間をどのように使用したのかを明らかにすることができる。

ここでは、具体的事例として、南後(2016)が「広場」の分析の始点として位置づけた、1969年当時の新宿西口地下広場という空間を検討してみたい。

4. 新宿西口地下広場という空間

新宿西口地下広場は、坂倉準三建築研究所の設計によって1966年に竣工した。新宿駅西口方面に位置していた淀橋浄水場が廃止されるのにもない、その跡地の再開発計画の一環として新宿駅そのものが改造されたのである(南後2016: 79)。国鉄のみならず、京王線や小田急線といった私鉄各線、そして地下鉄丸ノ内線などが集積していた新宿駅は、1969年までに平日の利用客数が推定で100万人を超えていた(Sand 2013: 36)。この膨大な人間や自動車、バスの流れを許容しかつ制御するため、新たに再開発された新宿西口地下広場は立体構造とされた。すなわち、地下2階に駐車場がおかれ、地下1階に各鉄道線の乗り換えの導線が集約され、地上階は百貨店にあてられたのである(南後2016: 79)。

この広場のコンセプトは、まず第一に「流れが妨げられないこと」であり、日本建築学会の報告では「流動広場」と呼称された。2階建ての螺旋構造をとった歩車分離を行うことで、一度に10万人の歩行者と2500台の自動車を立体的に整理できるとされたのである。これは既存の新宿駅の混雑緩和という目的のほか、淀橋浄水場跡地の再開発計画である新宿副都心計画の最初の一步としても目されていた。つまり、のちに跡地を一大ビジネス街として開発し、それにとまって生じる通勤客需要を制御しようとしていたわけである(Sand 2013: 36-40)。

また、これに関連して「地下都市」というキーワードもうちだされていた。建築家たちは「地下に延びるスペースを、車道から追われた人間の敗北と見るか、あるいは積極的に新しい都市スペースの獲得へ今一度前進させるか」という問題を提起し、地上部分を自動車交通へあけ渡す一方で、地下の歩行者空間に大きな開口を開け、「新鮮な外気や太陽の光」をとりこむことで、地下にしながら地上を感じさせるような空

間をめざしていた（東野 [1969] 2013: 252）。

この新しい「立体広場」計画には、商業資本も深く関与していた。計画に参加していた小田急百貨店は店舗面積の最大化を要求したが、建築家側は地上と地下を繋ぐ螺旋車道を開放し、床面積を減らすことで光と空気を地下階にもとりこむことを強く主張した。坂倉準三建築研究所の建築家たちによれば、当初はこの地下広場は完全に自動車本位の空間として計画されており、歩行者目線の景観については何も考慮されていなかったのだという（Sand 2013: 40）。

ここで重要なのは、Sand（2013）が指摘する通り、建築家たちが新宿西口地下広場の集合場所としての潜在的可能性にまったく言及していないという点である。計画者たちは、この空間に「広場」の名を与える一方で、人々の集合する場所としては想定していなかった。実際に設計に携わった東孝光と田中一昭に東野芳明（[1969] 2013）がインタビューしたところによれば、ここが「広場」と命名されたのには特に根拠はなく、利用者の混雑を防ぐための場所をたまたま「広場」と名づけたにすぎなかったという（東野 [1969] 2013: 251）。「広場」という単語は、「立ち止まる」という行為が許容されていることを暗示する言葉であるにもかかわらず、「流動広場」という撞着語法で新宿西口地下広場が語られていたことは、まさに象徴的な事実であったといえる。

「流動広場」として計画者たちが意図していた一方で、新宿西口地下広場を「広場」として解釈する者たちが現れはじめる。1968年から1969年にかけて現れたこの集団は、「フォークゲリラ」と呼ばれた。実際には、「フォークゲリラ」以前からそれに類似する光景が新宿ではみられていた。西口広場が竣工するより前から、淀橋浄水場跡地周辺で、マンドリンやギターを弾く者、詩吟する者たちが数十個のグループになって集まっていたのだという（南後 2016: 80）。これにはまず背景として、当時の新宿という街がどのような空間として成立していたかをみる必要があるだろう。

戦後直後に隆盛をきわめた闇市場によって独特のイメージを形成した新宿という街は、1960年代以降から左翼学生や演劇青年、音楽家、「フーテン族」等によって担われるアンダーグラウンド文化の拠点としての性格を強めるようになった。1967年に唐十郎が花園神社境内で紅テントを張ったゲリラ演劇を行なった。翌1968年、木島則夫ハプニングショーが群衆の殺到により失敗したほか、10月21日のピースデーには機動隊とベトナム戦争反対派デモが新宿駅周辺で衝突し、線路内になだれこむという新宿騒乱事件が起こった。1969年には、唐十郎の状況劇場が逮捕された。そしてこれらの事件にメディアが注目し、アングラ文化の拠点というイメージをいだいて地方出身の若者たちが新宿に集まるようになる（吉見 2008: 277-95; Sand 2013: 34）。新

新宿西口地下広場でフォークゲリラが展開されるようになったころとは、こうした時代だった。

また、新宿西口地下広場という具体的な場所そのものに埋めこまれていた経験にも注目したい。当時すでに、反戦・反安保デモ行進はその終着点として新宿西口地下広場を設定するものが多く、当時の新宿西口地下広場には反ベトナム戦争運動を受け入れるような文脈が用意されていた。

そしてその地下広場に注目したのがフォークゲリラたちだった。彼らはギターを持ち、反戦歌などのレパトリーを毎週土曜日に地下広場で弾き語り、それにつられて集まってきた若者たちが周囲に円をつくって座りこんだり、討論をしたりするようになった。

5. 「ベ平連」のイデオロギー

フォークゲリラたちの活動を支えた思想はどのようなものだったのだろうか。

1965年、ベトナム戦争での米軍の物資補給や軍用機発着が日本国内の米軍基地で行われていることを問題視し、作家小田実を代表に、「①ベトナムに平和を、②ベトナムはベトナム人の手に、③日本政府は戦争に協力するな」をスローガンとして、「ベトナムに平和を！ 市民文化団体連合」が発足した。翌年には名称が「ベトナムに平和を！ 市民連合」に変更され、略称で「ベ平連」と呼ばれるようになった。ベ平連は上意下達の組織化を避けるため、既存の左翼団体からは距離をおこうとし、各地で「ベ平連」を名のりたい者が自由に名のる、というフランチャイズ的な方式を採用していた。最盛期の1969年には、全国で約360の「ベ平連」が存在していたという（鈴木2014: 7-8）。新宿のフォークゲリラたちも、その数ある「ベ平連」を名のる中の一つだった。その意味では、ベ平連やフォークゲリラとは、確固とした構成員をもつ団体というよりは、1つの社会現象であったとするのが妥当だろう。

そしてちょうど同じ1960年代、建築学の文脈では、日本の伝統的都市空間の再評価が始まりつつあった。前近代の寺社境内における祭りや市が、個々人の都市住民の自発性の発露であったと同時に、逸脱した行為を許容するものであったという言説である。Sand (2013) は、伊藤ていじと磯崎新らの著作を引用しながら、「市民のための都市空間が存在してこなかった」という日本の都市空間言説に変革が求められ、いわゆる「西洋社会」とは異なる形での都市の民衆空間が存在していたという言説が出現したことを指摘している。すなわち、日本の都市空間とは、自治都市における「広場」のような定形の空間ではなく、人々の自発的で自然発生的 (spontaneous) な活動に

よって空間が占有 (appropriate) されることで創り出される、ある種の雰囲気のようなもので規定されてきたのだと。そしてその雰囲気は、「界限」と名づけられた(Sand 2013: 31-2)。

この議論自体は、もっぱら都市空間の形態に関心を寄せるものだった。しかし、ここでキーワードとなる「自発性 (spontaneity)」は、羽仁五郎の「自由討論の場としての広場」という概念と親和的だった。そして同時に「界限」概念は、都市空間とはどの程度まで、誰によって自発的活動の場として占有 (appropriation) されることのできるのか、という社会的・法的な問題を暗に提起するものでもあった。ここで、行政が市民に提供するオープンスペースと、なし崩し的に市民の日常的活動によって占有され獲得される空間としてのコモンズという分類が浮かび上がる。この二分法では「コモンズ」側を指している「界限」概念は、市民政治の文脈に日常性というキーワードをもちこむことになった (Sand 2013: 33)。

この「コモンズ」の思想は、ベ平連とも親和的だったといえる。鈴木(2014)によれば、ベ平連は暗黙の行動原理として、「自発的な個人を参加主体とし」ていた。また、「非暴力直接行動」と銘打ち、デモ行進やボイコット、ストライキ、座りこみ、請願、そして断食などの非暴力的な運動を理念として掲げていた(鈴木 2014: 8)。また、フォークゲリラの1人だった大木晴子は、「ベ平連は、あくまで個人意思による参加を基本にした運動だったから」(大木ほか 2014: 53) と述べている。

こうした理念が現実的にもどの程度貫徹されていたのかについては、また別の詳細な分析が必要となるので、ここでは問題としない。しかし行動方針として、個人を参加主体とする「自発性」の重視や、デモ行進・座りこみなど都市空間の占有の実行などは、羽仁五郎的な「広場」概念や「界限」概念と共鳴するものであったといえるだろう。

また、1969年には従来の暴力的闘争の限界が示されつつあった。東京大学安田講堂にたてこもった学生運動活動家が、機動隊導入によって鎮圧されたのはこの年の1月だった。キャンパスという重要な活動基盤を失った学生運動は低迷しはじめ、闘争の場は学外へと押し出されていった(鈴木 2014: 7)。

こうした潮流の中で、国家が用意した「広場」が主権者としての国民の闘争や意思表示の場になるという従来の言説は、ユートピア的として批判されていく。かわって、居住者であれば誰でも人は公共空間をコモンズとして占有する権利をもつという認識が広がる。そしてそうした日常的な実践によって、封建国家のみならず家族や農村といった保守的勢力をも打破することができるとされた。この考えは上京した地方出身の若者たちの心をとらえ、そしてベ平連の活動にも通底する思想となった。従来の垂

直的構造をもった組織的なデモ運動は否定され、日常的活動の延長線上での都市空間の占有がめざされた。そしてベ平連は、従来のような暴力的闘争を否定し、多分に祝祭的なデモ活動を希求していた。たとえば、終戦直後の皇居前広場でのメーデーや、1960年の安保反対の国会前デモなどは、警察による許可に比較的従順に従っていた。対して、ベ平連がとった戦略は、計画も許可もないままでただ集まり、活動家も通行人も傍観者もその集まりの中にとりこんでしまうことで、政治性を日常活動にもちこもうというものだった（Sand: 2013: 36）。

6. フォーク集会の展開

最初に新宿西口地下広場で歌が歌われたのは、1968年12月28日に行われた「絶対にジグザグデモをせず、交通を妨害せず、商店に迷惑をかけず、2列になり、花束を持って、ベトナム戦争反対・米軍タンク車通過反対を訴えるデモ」、通称「花束デモ」でだった。ベ平連の定例会ではすでに、ジグザグデモを行う人々が現れ、逮捕者が出る事態にも発展していた。同時に、その手法自体に異を唱える者や、子連れ、高齢者など、ジグザグデモを敬遠する人々も少なからず存在し、その人々の受け皿となることを狙ったのが「花束デモ」だったという。大久保公園に集まった150人ほどの参加者は、持ち寄った花束を手にデモ行進に出発した。先頭には、北摂市の「ベ平連」メンバーがフォークソングを歌いながら参加していた（大木ほか2014: 38-40）。

これが新宿で行われたのにも理由があった。当時、米軍立川基地から発着する軍用機用のジェット燃料を積んだタンク貨物列車が中央線を走っており、新宿駅はその補給路の通過点だった。1968年8月8日には、新宿駅構内でタンク貨物列車と別の貨物列車が衝突、漏れたジェット燃料に引火し爆発する事故も発生していた（大木ほか2014: 38-40）。「ベトナム反戦」を訴える上で、新宿駅という場所には必然性が存在していた。

一方、地下空間で歌を歌うというデモ活動は、もともと大阪の梅田地下街で始まったものだった。「花束デモ」で北摂市「ベ平連」のフォークソング戦略にふれたベ平連メンバーは、直後に大阪の梅田地下街へ視察に行った。視察メンバーの大木晴子ほか（2014）は、地下街でのフォークソングについてこう述べている。「大阪の集会は規模は小さかったけれど、エネルギーが満ちて素敵だった。『これなら新宿でできそうだ』と思って、わたしは大阪で小黑さんに選んでもらってギターを買った」。そして、新宿のどこで歌うかについて話し合い、音が響きかつ雨が当たらない地下空間である新宿西口地下広場が選ばれたという（大木ほか2014: 42-50）。

「エネルギーが満ちて」いたという大木の印象は、梅田地下街の地下という空間性と無縁ではなかつただろう。音が響きわたるといふ演出は、聴く者に「エネルギー」を感じさせていた。土木技術の粋を集めて完成した新宿西口地下広場を、フォークゲリラは「エネルギー」の演出が可能な空間として読み替え、そして天候に左右されず集会が行える場所として解釈していたのだ。

こうして、大木晴子をはじめとするフォークゲリラ数人が、新宿西口地下広場で歌いはじめた。彼女によれば、フォーク集会の最終的な目的は、合唱のあとで小さな討論の輪に分かれて話し合いをすることだったという（大木ほか 2014: 65）。これについて Sand (2013) は、ベ平連の目的が、ハーバーマスの公共圏とは異なるものを形成することにあつたことを指摘している。フォーク集会では、最終的に何らかの結論を導き出すことは考えられていなかったのである。彼らの主眼は、他人同士の通行人が立ち止まり、議論し、ともに歌うことで、意思表示が行われることだった。その意味で、フォークゲリラにとって活動場所は、公園など公共空間であればどこでも良かったわけではなく、あくまで新宿西口地下広場でなければならなかつた。新宿西口地下広場には、他の場所ではけつて得られない、膨大な他人同士の通行があつた。ほかならぬ「出会いの空間」とそこでの議論を希求した彼らにとって、単なるオープンスペースではない、日本一の交通ハブとしての新宿駅が重要だったのである（Sand 2013: 39-41）。

新宿西口地下広場の雑踏でフォークソングを歌うことで、通行人を集会へと勧誘するとき、フォークゲリラたちの間でもソングの意味は様々に解釈されていた。大木晴子はフォークソングを、通行人を立ち止まらせ討論の輪に参加させるための、あくまでツールとして捉えていた。それに対して高野光世は、フォークソングそのものに意味を見いだしていた。歌が、ステージやコンサートで入場料を支払って聴くものになっていることの問題を提起し、「“音楽”というものを、文字どおり直接に日常の中に投げ込んで、生きたものとして再生させ」ようとしていたという（大木ほか 2014: 61-2）。事前に、誰が、何を歌うかが決定されている、管理されたステージでのフォークソングではなく、誰もが参入できる日常の空間の中にもちこまれるフォークソングが重視された。新宿西口地下広場では、「ベトナム反戦」や「広場の獲得」のみならず、「フォークソングとはどうあるべきか」といった広範なテーマが渦巻いていたのである。

また、新宿西口地下広場で歌われた曲には、替え歌が少なくなかつた。それらは、当時ヒットしていたフォークソングの歌詞のみを変えたものだった（大川 2014: 123-4）。ヒット曲のメロディーを使用し、機動隊や政府を揶揄する歌詞に変えることで、

既成のフォークソングを抵抗の意味をもつ歌へと改造していたのである。この戦略は、のちにフォーク集会の参加者が爆発的に増加する一因にもなったと考えられる。すなわち、『インターナショナル』のような強い党派性をもつ歌は避け、誰もが知っているメロディーを採用することで、それまでベ平連運動に参加したことがなかった人々の、参入のハードルが低くなっていったのである。

こうしたフォークゲリラの戦略が可能になったのは、学生にも入手可能な音響電気機器の存在が大きかった。新宿ベ平連のフォークゲリラたちは、毎週土曜日、ベ平連事務所に置いていたアンプとバッテリーを取ると、新宿西口地下広場へ向かっていった。フォーク集会での演説や合唱にはトランジスタメガフォンも使用された（大木ほか 2014: 43-53）。

そのうち、ガリ版刷りホチキスどめの歌集も新宿ベ平連で作られるようになり、これを新宿西口地下広場で売ることが重要な資金源になった。ベ平連の運動に便乗して、自分の歌集を売りはじめる者も現れた。「ベトナム反戦」を銘打ったカンパを行い、そのままその金を持ち逃げする者も現れた。互いに正体を知らない、雑多な他人同士が集散しながら、新宿西口地下広場のフォーク集会は、さながら「市場」のような様相を呈していたという（大木ほか 2014: 64-5）。

合唱が終わったあとの討論の輪には、デモができるのは若い「いまのうちだけだ」と言う中年男性など、フォーク集会に批判的な言葉を投げかける通行人も入ってきた。この光景について大木晴子は、「おたがいの生き方を認めながら、なお話しあおうとしていた」と評価する（大木ほか 2014: 65-6）。ここには、批判者をも集会の一部としてとりこんでしまおうというベ平連の戦略を読みとることができないだろうか。つまり、ベ平連の若者たちを叱責する中年男性もまた、討論の輪の一員としていつのまにか参加してしまっているとともに、フォーク集会に動員された内の1人となってしまっているのである。

その一方、フォーク集会末期に暴動に発展した際の様子をとらえた映像では、デモ隊の大部分が男性であったことも指摘されており（Eckersall 2011: 337）、こうした運動が男性中心的なものであったことには注意しておかねばならない。

7. 「広場」に響いた音響

さてここで、見知らぬ他人同士が参入するフォーク集会という場について、吉見（2008）が指摘する、1960年代までの〈新宿的なもの〉の最も重要な特徴としての「共同性の交感」という概念を補助線として導入したい。曰く、新宿という地で「演

じられていく諸々の出来事」が、「参与する人々の濃密なコミュニケーションを媒介」として「共同性の交感」とでも呼ぶべきものを生み、それが出来事の成り行きを大きく変化させていく契機となっていたという。さらに吉見は、「共同性の交感」を「演者と観客相互の交感」と呼び替えた上で、その原型を1950年代のうたごえ喫茶に見だし、その根拠に開高健の以下の文章を引用している（吉見2008:284）。

みんながたがいに独立して、人がうたおうが、うたうまいが、知らん顔している。けれど合唱はおどろくほど巧みである。低音部、高音部をみごとに使いわけて、襞のゆたかな、輝かしい急流、浅瀬、よどみ、滝をつくり、こわし、消し、出現させている。（開高[1964]2007:356）

そして、「六〇年代末のフォーク集会も、それらうたごえ運動やうたごえ喫茶のなかで育まれた共同性の感覚が、街頭化し、より先鋭化したものという側面をもって」と吉見は結んでいる（吉見2008:284）。

吉見がいう「共同性の感覚」とは、やや抽象的な概念であり、それは「出来事」と「参与する人びと相互の濃密なコミュニケーション」から生まれるものであるという（吉見2008:284）。しかし、これをより具体的・物理的な現象として解釈するならば、吉見が指摘しなかった「感覚」の重要な一端として、「音」があるのではないだろうか。そしてその「音」とは、うたごえ喫茶に集う人々が創り出す合唱であり、フォーク集会のフォークゲリラたちがくりひろげるギターの音である。

ギターという楽器が導入され、そして日比谷焼打事件の時代にはまだ登場してまもなくメガホンの進化形としてのトランジスタメガホンが登場したことで、フォークゲリラたちはフォークソングを歌うとともに、自らの主張を物理的に拡声したのである。その音は1950年代におけるうたごえ喫茶のように、喫茶店の内部にとどまるものではなく、ベ平連の戦略によって街頭の「広場」へもち出された。

またそこでは、新宿西口地下広場の「地下広場」という空間が重要な役割を果たしていたと考えられる。つまり、天井が存在する室内空間であることによって、音が反響するのである。ここでは、新宿西口地下広場で行われた最後の集会での東野（[1969]2013）のルポを参照したい。まず「天井が低い」ことによって、「あふれるような熱気」と「人いきれ」が増幅されていた。そして、フォークゲリラが「精度のあまりよくないマイクで、替え歌をがなりたてると、わーんと合唱が割れた音になってひび」いたのである（東野[1969]2013:247）。

従来のオープンスペースで実現されていた音響とはまったく異なったものが、土木

技術と音響技術の進化によって実現された「地下立体広場」という空間にたちあがったのである。巨大な半屋内空間が用意されることで、フォークゲリラはより効果的に「音」や「熱気」を演出することができ、通行人を合唱や演説、討論のサークルへと巻きこむことができるようになる。これを抽象化すればすなわち、吉見（2008）が指摘した「共同性の交感」となるのではないだろうか。

こうして、フォークゲリラが新宿西口地下広場の交番近くの角柱を背にギターを弾きはじめると、人々が「池に石を落とした時に出来る波紋のように座り始めた」という（大木ほか 2014: 53）。ここで思い出したいのが、新宿西口地下広場の設計担当者である東孝光と田中一昭の次の言葉である。「人の流れが常に一定方向の流れでなく多様な方向の流れとよどみを受けとめなければならないという意味で、方向性を持たない磁器タイルによる円形パターンが全コンコースに使われた」（東・田中 1967: 66）。南後（2016）はこれについて、床の各所に散在する円形状のタイルが人々に滞留を促したとしている（南後 2016: 80）。

地下広場の設計者が用いる「よどみ」や「円形パターン」という語彙と、その地下広場を設計者が意図しなかった形で使用したフォークゲリラが用いる「池」や「波紋」という語彙には、何か共通したものを感じる。設計者が「多様な方向の流れとよどみ」を許容する意図で床のタイルパターンを施した地下広場は、フォークゲリラの周りに人が集まり座りこむことで、その意図通りに「よどみ」を実現していた。しかし、設計者が意図していたのは、あくまで膨大な交通を効率的に流動させるための「流れ」であり、その流れを効率的に受けとめる緩衝地帯としての「よどみ」であって、その交通を不可能にしてしまう座りこみという形での「よどみ」ではけっしてなかった。

「よどみ」の例からうかがえるのは、フォークゲリラたちは、まったく想定されていなかった「広場」の使用を無から創出したわけでは必ずしもなかったことである。ある程度は設計者の意図通りに動かされ、しかしその中で設計者の意図を超えた行動に接続していく。新宿西口地下広場の占有とは、設計者と利用者の微妙な相互作用を通じて現出したものだったといえるだろう。

新宿西口地下広場には、見るべき方向も見るとべき舞台も存在していなかった。むしろ設計者は、あえて方向性をもたせないように空間を演出していた。ただしそれは、あくまで「人の流れが常に一定方向の流れでなく多様な方向の流れとよどみを受けとめ」るため、つまり歩行者の交通の合理化のための「方向性を持たない磁器タイルによる円形パターン」だった。しかし結果として、その無方向性はフォークゲリラたちが理想とする「広場」の創出に資することとなった。ギターを持ったフォークゲリラが集会の核となり、その周囲には複数の小さな討論の集まりができた（大木ほか

2014: 53)。これらは、参加者が向くべき方向が、一括して決定されていない空間であったことが大きかったといえるだろう。

8. 想定外の事態

フォーク集会の輪ははじめ 20～30 人だったが、回を重ねるごとに人数が増えていった。これは、当のフォークゲリラたち自身にとっても想定外の事態だった。大木晴子は「どんどん集会が成長していき、警備も強化されていく。予想よりも速く事態は動いていった」と述べている。そして、新宿西口地下広場が、一般市民も日常的に使用する空間であったがゆえに、「公衆電話が騒音で聞こえない」や「商売の邪魔になる」などの、苦情が警察に寄せられるようになった。警察にとって、こうした苦情は取り締まりを行う口実として十分だった。5月14日に警視庁が機動隊を動員し、新宿西口地下広場のカンパ活動を排除した。しかしこれが逆に宣伝効果をもち、大木自身が「あまりの多さに体が震えました」と想起するほどに、5月17日のフォーク集会では人数が急増してしまう (Sand 2013: 37; 大木ほか 2014: 66-7)。

微妙な日時のずれはあるものの、新聞発表をまとめた東京都企画調整局調査部の報告によれば、5月17日には100人だったフォーク集会の参加者は、ギターを持った非暴力的なフォークゲリラが連行された事実を受けて、5月24日には3000人に激増している。逆に警察側はしばらくは規制人員数を減らし、実力行使ではなく地下広場での放送で解散を呼びかけるにとどまっていた。その間にもフォーク集会の参加者は増え続け、6月28日には7000人に達した (東京都企画調整局調査部 1973: 81)。

人数が爆発的に増えると、新宿駅という巨大な交通ハブを「広場化」した群衆は、そのまま車道へと流れこむようになった。地下広場の前に接続する車道のループ線は、完全に群衆が歩き回る「散歩道」と化していた。「車道に仰向けにねころがって、星を見ている」者もみられる (東野 [1969] 2013: 247-8) など、道路という交通空間が失効されていたのだ。群衆が歩行者空間を拡大することで交通を麻痺させていた一方で、管理者側も「拡大」を凶っていた。最後のフォーク集会の夜には、改札口が一時的に外側へと拡張された。「改札口という境界を移動させることで、少しでも集会の面積を少なくして駅の中にとり込もう」という管理者側の戦術が読みとれる (東野 [1969] 2013: 246)。

今や、フォークゲリラの意図も、警察の意図も及ばないところで、新宿西口地下広場という〈広場的現象〉が転がりはじめたのである。

もともと、新宿ベ平連はフォークゲリラとして、『インターナショナル』など党派

性の強い歌を歌うことはしなかった。フォーク集会では、メーデーのように群衆が『インターナショナル』や『ワルシャワ労働歌』を歌う場面もみられたが、それはあくまで「群衆がかってに」歌いだしてしまったものだった（大木ほか 2014: 58）。

しかし、5月24日の集会からは、大学闘争のバリケードから駆けつけた日大全共闘のメンバーが多く参加し、『インターナショナル』の合唱が頻発するようになった。これについて、フォークゲリラたちも「『インターナショナル』の歌に象徴される、党派の跋扈にとまどいを感じた」と述べている（大木ほか 2014: 82-3）。この招かれざる客に対するフォークゲリラたちの反応には、左翼系学生団体という組織によって、『インターナショナル』という組織化の象徴がもちこまれたことへの困惑が読みとれる。つまりこの「とまどい」とは、組織化に対する拒否感情だったのだ。

組織化を拒否するフォークゲリラの活動は、警察にとっても取り締まりのしにくいものだった。投入された警官隊と機動隊は、代表的なフォークゲリラたちを連行するものの、地上のやや離れた地点まで来ると、逮捕せずに放免するほかなかった。隊列の存在するデモは、隊列という単位があるゆえに、デモ隊側は届出が可能であり、警察側は取り締まりの対象とすることができる。しかしゲリラ的デモでは、ヘルメットやタオルマスクなど統一的なデモ隊のファッションが存在せず、参加者と非参加者の区別も不可能であるため、デモから離れてしまえば警察側も手出しができない（大木ほか 2014: 72-3）。

これを象徴しているのが、次の新聞記事である。

三人の若者は、ギターをひき始めたとたん、三十人の警官にかかえられるように駅前広場へ。この実力排除で、地下広場にいたベ平連の約百人、それに通行人が加わって“帰れ、帰れ”のシュプレヒコール。続いて一斉に反戦ソング「友よ」の大合唱。そこで同駅地下駐車場に待機していた機動隊員百人が出動、合唱をやめさせるとともに、通行人に「早く歩いて下さい」と呼びかけたが、機動隊がかけよると、歌ごえはピタリとストップ。一方を規制すれば、他方でまた新たに歌ごえ。さすがの機動隊員も、この“歌ごえゲリラ”には一時、手のほどこしようもなかった。……通勤客までしばしば足止めをうけ「なんで歩かせないんだ」と機動隊員に食ってかかる始末。……（『読売新聞』1969.5.18 朝刊，15面）

組織構造をとらない、きわめて流動的な運動形態の採用自体は、上意下達的なヒエラルキーを否定するというイデオロギー的なものだった。しかしそれが結果として、警察の取り締まりをかいくぐるという戦略的效果を生み出したのである。

また、こうした取り締まりのしにくさを生み出したのは、ベ平連の意識的な戦略ばかりではなかった。後述する、新宿西口地下「広場」が消え「通路」になったその翌週の土曜日、立ち止まる歩行者を警察官が徹底的に追い散らす一方で、ゲリラ的にシュプレヒコールを叫ぶ一群がみられた。すでに強調した通り、新宿西口地下広場は各路線の乗客の導線を効率的に運用するため、各階が至る所で階段によって結ばれ、複雑な構造をなしている。シュプレヒコールを叫んだ一群が警察に追い散らされたかと思うと、彼らは分散して方々の階段から地上へと抜け出し、そしてふたたびあちこちから下に降りてきて集合し、コールをくり返していたというのである（東野 [1969] 2013: 249-50）。逃げそこなったメンバーが、タクシー乗り場の列に紛れてやり過ごすというのも、日常的な通勤通学の間ならではの逃げ道といえるだろう。交通の合理化をめざした空間構造であったゆえに、警察も取り締まりの焦点が定められなくなり、皮肉にもゲリラ的な反抗運動が可能となっていた。

最終的に警察がとった手段は、フォークゲリラたちの意表を突くものだった。新宿西口地下広場が行政区分では公道に該当することを発見した警察は、ここに道路交通法を適用し、すべての集会を禁止する根拠を得た。7月19日、一夜にして新宿西口地下広場のサインはすべて「新宿西口地下通路」へととり替えられ、ここが「広場」などではなかったことが示された。これ以降、常駐する機動隊員によって、少しでも立ち止まるそぶりを見せた通行人は徹底的に蹴散らされ、新宿フォーク集会は終焉を迎えた（Sand 2013: 37-41）。

9. 占有の挫折

新宿西口地下広場におけるフォーク集会が明らかにしたのは、次のことだった。便宜的に広場と名づけられたただの駅の出入口も、ひとたび集会や討論が行われると、そこが本当に人々が集まる「広場」と化してしまいうる。しかも、そこは本来オープンスペースですらなく、群衆が集散する空間としてまったく適したものでもなかった。聞こえの良さから適当に広場と名づけられた空間が、まさにその名づけによって、力をもってしまったのである。そして、警察もまたこの名づけの力を思い知ったからこそ、新宿西口地下広場にあったすべての「広場」表記を「通路」に変えるという徒勞を、あえてしたのであった（Sand 2013: 41-2）。

フォークゲリラが新宿西口地下広場を「広場」として読み替える上で、その根拠となったのは、都市の雑多な居住者たちが意見を交流させる場としての「コモンズ」という発想だった。国家という枠組みを前提とした存在としての「国民」を名のる限り

においては、人々の闘争の場所として、国家が提供するオープンスペースが選ばれざるをえない。しかしここでは、国家でも国民でもないただの「人々」が、居住者の権利として、誰のものでもない新宿西口地下広場を占有したのだった（Sand 2013: 42-3）。

フォーク集会の会場としての新宿西口地下広場の特徴は、公園や広場などの従来のデモ会場とは異なり、空間の範囲が明確に区画されておらず、本来は通勤・買物客がただ通過することのみが想定された空間であった点にある。そして、デモ行進とは異なり、参加者はもともと他人同士で、たまたまそこに居合わせ、討論し、歌うのみの間柄だった。Sand（2013）はこれについて、ハーバーマスの意味での公共圏の理想像に、祝祭的要素が付加された姿であると指摘している（Sand 2013: 37-8）。

都市計画の段階で、とりあえず聞こえが良いから「広場」と名づけられた空間が、居住者としての権利を行使するベ平連の実践によって、本当に「広場」になってしまった。これが新宿西口地下広場のパラドクスである。

ベ平連が用いた「非暴力」という手法が、それまでの反戦運動や学生運動におけるデモ隊と警察の双方による「暴力」のコンテクストを前提としていたことにも留意しておきたい。すなわち一連の闘争の中で、公的政策と機動隊による国家的暴力が地続きであることが認識されるようになり、さらにそれがメディアを通じて報道されることで、それまで区別して見なされていた「政治的活動家」と「一般市民・一般学生」との概念距離が縮まっていく。デモ隊に対する同情が世論の中で醸成されるとともに、ベトナム戦争や米軍基地問題といった政治的イシューへの関心が高まる。警察による大規模な「暴力」によって社会的注目が集まり、その中で従来はほとんど関心をもたれなかった「非暴力」運動が、効果的な手法として浮かび上がってくるのである。まさに、「暴力によって非暴力が可能となる」という逆説的な状況が作りだされた（Marotti 2009: 128-9; Sand 2013: 175）。

これは、ベ平連が機動隊という管理の装置を逆手にとって自らの演出装置として利用した、という反抗のストーリーとして解釈できる一方で、そもそも新宿西口地下広場という空間が、それまでのデモ隊と機動隊との衝突事件という文脈をふまえた上で、機動隊の存在を前提として内包していたとも読みとれる。すなわち、フォークゲリラたちが新宿西口地下広場という場所を集会の拠点として選んだとき、単にアングラ文化の拠点としての新宿イメージだけではなく、新宿西口中央公園や新宿騒乱事件においてくりひろげられていた「暴力」そのものが重要な誘因として作用していたのだ。

しかし、居住者としての権利も、非暴力的な祝祭型デモも、それを可能にした名づけの戦略そのものによって、鎮圧された。「広場」は「通路」へと変わり、その空間

の用途があらためて定義づけられた。入場料によって管理されたフォークソングを、日常空間の中に投げこみなおそうとした、あるフォークゲリラの試みも否定され、歌はコンサート会場で歌うものであることが示された。これ以降、同じ規模で、人々が都市空間の所有を主張し占有することはほとんどなくなる。

10. 結章

本稿の分析を終えて、1969年の新宿西口地下広場のフォーク集会を、自発的に空間を広場化したフォークゲリラたちが、都市の効率的なサーキュレーションを重視する管理者たちによって鎮圧された事件、と単純に理解するのみでは不十分であることを確認しておきたい。

再開発される新宿副都心に流れこむ膨大な人間と自動車の流れを制御すべく、「流動広場」として土木技術の粋を集めて建設されたのが、新宿西口地下広場だった。このとき設計者たちは、歩行者の流れを受けとめるための「ひらけた空間」という意味で、ここを「広場」と名づけたにすぎなかった。すなわちここは、都市に集中する膨大な人の流れを効率的に動かすために、きわめて緻密な管理がおこなわれた空間だった。

しかし、新宿駅という立地と、地下広場という空間性に目をつけたフォークゲリラたちがギターを弾きはじめると、流動するはずだった新宿西口地下広場は、人々が集まり居すわる「広場」としての性格をおびはじめる。毎週土曜日には、地下広場に反響する歌声と熱気によって「共同性の交感」がもたらされ、不定形な討論の輪が形成された。彼らは、管理者によってあらかじめ定められた空間の用途を揺るがそうとしたわけだが、当初においてはそれほど大規模な空間の占有を目指していたわけではなかった。

空間の管理者である設計家たちも、そして空間の使用者であるフォークゲリラたちも、予想しなかったかたちで集会参加者は増えつづける。その結果、徐々に警察は取り締まりの攻勢を強め、道路交通法を根拠にここが「広場」ではなく「通路」であり、集会が許されない空間であることを通告し、フォーク集会は鎮圧された。

「ひらけた空間」としての「広場」にすぎなかったものが、雑多な個々人の「討論の場」としての「広場」に読み替えられ、そしてそこが実は「通路」であったと再解釈されるという、名づけのポリティクスが作動し続けたのが新宿西口地下広場だった。

フォークゲリラたちは、自発的な新宿西口地下広場の使用をけっして無からつくりだしたわけではなかった。むしろ、設計者たちがはじめから管理していた地下空間を、同時代の「コモンズ」の思想を背景に、フォーク集会に最適な音響空間として読みか

えたのだった。そこでは、フォークギターやメガホンが通行人を立ち止まらせるための装置として動員され、ベ平連の思想に共鳴するかしないかを問わず、その場にいる人々をフォーク集会の一員として飲みこむ戦略が発動されていた。いわば、空間の管理者の虚をつくかたちでフォークゲリラたちは新宿西口地下広場を使用していったが、フォーク集会は当のゲリラたちの意図すら超えたかたちで規模を拡大していった。その結果、当初フォークゲリラたちが使ったまさに同じ名づけの戦略によって、新宿西口地下広場は「広場」ではなく「通路」だということにされ、集会は完全に鎮圧されたのだった。

このように、空間の管理者と使用者がそれぞれ動員したイデオロギーを精緻にみていくだけでなく、実際に身体的なレベルでそのイデオロギーがどのように具現化されていたのかをみることで、単純な「空間の管理化」というシナリオだけでは浮かびあがってこなかった論点を析出させることができる。

今後は、音響や熱気といった身体感覚的な空間の側面や、もともとの用途とは別の目的への空間の転用といった論点を、どのように社会学的に理論化していくかが課題となる。現時点では、Henri Lefebvre や Michel de Certeau をはじめとする思想家による空間理論からこうした理論を構築していくことを構想しているが、より詳細な検討は次稿に譲りたい。

参考文献

- 阿部潔, 2006, 「公共空間の快適——規律から管理へ」阿部潔・成実弘至編『空間管理社会——監視と自由のパラドックス』新曜社, 18-56.
- 東孝光・田中一昭, 1967, 「地下空間の発見」『建築』中外出版, 79: 62-7.
- Eckersall, Peter, 2011, “The Emotional Geography of Shinjuku: The Case of Chikatetsu Hiroba (Underground Plaza, 1970),” *Japanese Studies*, 31(3): 333-43, (Retrieved November 19, 2019, <https://doi.org/10.1080/10371397.2011.619167>).
- 開高健, 1964, 「ずばり東京——『うたごえ』の喜びと悲しみ」『週刊朝日』69(42): 32-5. (再録: 2007, 『ずばり東京——開高健ルポルタージュ選集』光文社, 354-63.)
- Marotti, William, 2009, “Japan 1968: The Performance of Violence and the Theater of Protest,” *The American Historical Review*, 114(1): 97-135, (Retrieved November 19, 2019, <https://www.jstor.org/stable/30223645>).
- 松本康, 2014, 「都市圏の発展段階——都市化・郊外化・再都市化」松本康編『都市社会学・入門』有斐閣, 104-27.

- 南後由和, 2016, 「商業施設に埋蔵された『日本的広場』の行方」三浦展・藤村龍至・南後由和編『商業空間は何の夢を見たか』平凡社, 67-166.
- 大川昭一, 2014, 「『機動隊ブルース』の頃」大木晴子・鈴木一誌編『1969——新宿西口地下広場』新宿書房, 122-5.
- 大木晴子・大木茂・鈴木一誌, 2014, 「[インタビュー] フォークゲリラは終わらない——新宿西口地下広場とドキュメンタリー映画『地下広場』」大木晴子・鈴木一誌編『1969——新宿西口地下広場』新宿書房, 34-119.
- Sand, Jordan, 2013, *Tokyo Vernacular: Common Spaces, Local Histories, Found Objects*, Berkeley: University Of California Press.
- 鈴木一誌, 2014, 「はじめに 地下の広場から見る一九六九年」大木晴子・鈴木一誌編『1969——新宿西口地下広場』新宿書房, 6-9.
- 東野芳明, 1969, 「新宿西口“広場”の生態学」『中央公論』中央公論社, 84(10): 270-81. (再録:2013, 松井茂・伊村靖子編『虚像の時代——東野芳明美術批評選』河出書房新社, 256-39).
- 東京都企画調整局調査部, 1973, 『広場——その可能性と条件』.
- 読売新聞, 1969.5.18, 「歌ごえゲリラ騒動 新宿駅の地下広場 機動隊も手を焼く」朝刊, 15面.
- 吉見俊哉, 2008, 『都市のドラマトゥルギー——東京・盛り場の社会史』河出書房新社.